

### 序文にかえて——日本の読者のために

私は1924年、現在の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に当たる平安北道で生まれた。45年8月、日本の敗戦によって朝鮮半島は日本の支配から解放された。しかし同時に、国は南北に分断した。47年、私は南へ逃れた。

南の韓国では、分断の重荷を背負い、近代化、民主化、国民国家を樹立する道を歩みだす。1960年、韓国では4・19民主革命が起き、家父長的な独裁政権であった李承晩政権が倒れる。しかし翌61年5月16日、軍事クーデターによって朴正熙政権が成立し、産業化を掲げるようになる。朴正熙將軍による軍事独裁は、彼が暗殺される79年まで18年間続いた。

朴正熙が部下に射殺されたとき、ようやく韓国に民主化の春が訪れたと思われたが、全斗煥という別の將軍が立ちあがった。80年、全斗煥は、韓国南部・光州市での市民によるデモに軍隊を投入し、市民を虐殺した。政府は死者について市民154人を含む193人としているが、遺族団体などによって行方不明者も含め死者は約2000人といわれた。

87年6月、長い戦いを経て韓国で民主主義が勝利を収めることができた（6月抗争）。だがそれまでのあいだ、体制に異を唱える人たちの何人もが不当に逮捕され、拷問を受け、生命の危機にさらされ、また自ら死の道についた。金大中など野党の政治家の一部は、軍事裁判にかけられ死刑判決ま

でがでる始末であった。何よりもあの恐ろしい時代のなかにおける学園内の抵抗運動は、天をつくほどのものであった。

1972年10月、私は来日した。48歳だった。当時、韓国の軍人専制政治はいつ終わるとも知れなかった。私はもっと学問をしたいと考え、日本に来たのであった。しかし、数か月後には、私はT・K生の筆名で「韓国からの通信」を、岩波書店が発行する月刊誌『世界』に書きはじめた。

翌73年8月、東京のホテルから金大中が拉致されると、さらに政治的行動は避けられなくなった。私は「韓国からの通信」を書き続けた。それは単なる政治運動というよりは、国際的な市民運動といえるものだった。「韓国からの通信」は、73年5月号から88年3月号まで雑誌『世界』に掲載された。

「韓国からの通信」をT・K生という匿名にしたのは、当時の『世界』編集長・安江良介さんの特別の計らいによるものだった。それはもちろん、当局の監視の目を逃れるためであり、また何よりも韓国に残した私の家族を守るためであった。

私は「韓国からの通信」を、日本人をはじめとする多くの外国人が韓国から持ちだした資料にもとづいて執筆した。また、韓国から東京へやってくるさまざまな人びとの話も情報源となった。そして何よりも韓国国内に毎月極秘のメッセンジャーを送りこんで情報と資料を東京に運んでいただいた。そして私は新聞や民主化団体の声明文などを広く活用した。裁判記録などは手に入らないので、聞き伝えの内容をそのまま書いた。何よりも投獄者家族協議会がもつとも重要な情報源であった。

「通信」によって韓国国内の戦いが触発され、国内の人びとが情報を知りえたといわれた時代であった。その後、日韓のマスメディアと通信を比較しながらこの時代をほんとうはできるだけ正確に再生してみなければならなかったのだが、それはいままで果たせないでいる。

70年代から80年代にかけて、日本と韓国との市民のあいだでは、それまでになかったような互いに助けあう時代を初めてつくることができた。韓国は民主化し、それは一応成功した。その間日本は韓国の民主化運動を励ました。日本が、世界の国々と韓国市民との関係をとりもちながら。

最初は、日本のキリスト教会が動きはじめたのだったが、だんだんと日本の市民全体へと広がっていった。日本の知識人はヨーロッパと連携しながらベトナム戦争のとき戦ったが、その勢力がベトナム戦争後、韓国の民主化に立ちむかったともいえよう。

韓国では昨年（2016年）の秋から朴正熙の娘朴槿恵大統領の弾劾を求める声が強まっている。弾劾訴追案が国会で可決される直前のキャンドル集会には、ソウルだけで150万人以上の市民が集まったという。私自身、今回の韓国市民の戦いが、いかに正当な意味での民主主義の成熟のための戦いであり、それをいかに実践しながら戦ってきたか、ということ当初は認識していなかった。キャンドルデモがいかに整然としているか、また、そのようにリーダーたちが成熟しているのかを。

過去に私たちが戦ったときには知識人がリーダーシップをとったが、今回は文字通りの市民的な状況で展開していった。韓国の歴史はそれだけ進歩したのだ。今回の運動は、従来の民衆蜂起的なかたちではなく、きわめて民主的なプロセスを忍耐強くすすめるかたちで展開されていった。

今回のように、秩序正しく戦い続けながら政府をけん制していくというのは、新しいやり方だ。この方法で南北の問題もこれから進んでいくだろうと私は思っている。

韓国では、民主化勢力自身が金大中、盧武鉉政権時代に政治的に失敗したがゆえに、その後反動的な政府を誕生させてしまったが、韓国の市民はその反動政権を拒否した。しかも、朴槿恵政権の残党が代わって支配するようなことは許さず、朴槿恵を倒すことによって、過去の軍市政権の名残は

尽きてしまったといえるだろう。

しかし、これに対する日本のメディアの評価はどうだったか。その騒ぎは韓国民主主義の後進性の表れというようなものだったのではなからうか。

かつての軍事独裁政権に対する民主化運動に対しても、日本のメディアの当初の反応は、今回と同様であった。あのときも、後進国のやり方であり、それに意味を与えることができないというのが、最初の頃の日本の世論であった。そうした状況に対し、雑誌『世界』が中心となって、市民運動とともに宣伝しながら戦っていったのだ。そうして韓国の民主化運動が日本の市民のあいだでも正しく認識され、さらには、日本の市民が韓国の市民を励ますようになっていった。

今回の朴槿恵弾劾行動に対して、日本のメディアにはかつてのような姿勢は欠如していたように思われた。日本の一般的な世論だけでなく、雑誌『世界』の姿勢すらそうではなかったのではなからうか。時代に対して役割を果たせるメディアが存在しないとすれば、これは、日本の出版界を襲った危機の一つの表れでもあるだろうと私は思う。

民主化運動当時、雑誌『世界』は何万部も読まれていた。「韓国からの通信」は、新書として発行され累計50万部が読者の手に渡ったともいわれた。その時代の経験を忘れてはいないだろうか。当時の『世界』編集長・安江良介さんは、問題とすべきトピックを提示して、それに集中するようなジャーナリズム的な編集をした。一時は『世界』でなく『韓国』だ」と意地悪をいわれるほどだった。ジャーナリズムというのは、問題を発見し、それに対する解釈や評価を加えながら、そうすることで市民運動がそれに結集するような形にしていかなければならないだろう。市民の問題に対する関心を高め、市民的行動に対する励ましとならねばならない。とりわけ今日においてはそれが少なくと

もアジア的連帯という広がりをもたねばならないのではなからうか。

私は先日、いまの韓国の運動をしている人たちと話をしている、改めて安江良介さんのことや、当時の雑誌『世界』の姿勢を評価するようになった。安江さんは、日本の自民党の木村俊夫外相のようになりべらるな政治家を激励した。その当時の韓国で市民たちによって行われている状況を評価するようにと、日本の政治家、知識人、市民社会を励ました。そして、日本の市民が反ベトナム戦争で表した力を韓国のほうへ向けて大きな役割を果たすようにと仕向けた。

日本のマスメディアは当初、それほど韓国の民主化運動を評価していなかったことはすでに述べたが、たとえば金大中が日本に来たときも、最初はこのマスメディアも注目などしていなかった。あるいは相手にしていなかった。だから、安江さんと私は、いろいろなところへと彼を売りこもうとした。当時は『朝日ジャーナル』もあった。

私は、当時の『朝日新聞』を読み返した。韓国の軍部統治に対する市民・学生の抵抗を報道する日本のマスコミの最初の評価は、いわばいまと同じで、韓国では危ない連中が戦っている、それは後進国のやり方だ、というものだったのではなからうか。それが、『世界』と日本の市民が戦っていくなかで、次第に評価が変わり、日韓の市民的連帯を生みだしていったのではなからうか。

そして日本の自民党も、それまで日韓のあいだであまりよくない関係を続けていたが、市民の運動が強くなることによって、——あのあるときは、大平正芳さんが主に対応してくれたが——多少譲らないといけないという考えになっていったと思う。

日本の市民社会の韓国民主化運動への関心の高まりによって、ヨーロッパやアメリカの世論も動かされたことを思いださざるをえない。アメリカにおいても、ついにはレーガン政権すらその対韓姿勢

を変えざるをえなくなった。米副大統領などが、何度も韓国を訪れて全斗煥政権を抑えようとしたのではないか。このように、日本の市民が世界的な新しい動きのためにパイプ役となって韓国での動きに結びつき、韓国は民主化の時代に入ることができたのだった。

私は韓国の民主化を経験して、いま反省していることがある。

一つは、民主化して民主的な政府が成立すれば、政府と国民との関係はうまくいくだろうと考え、民主化運動の担い手たちがほとんど全面的に現実的政治から退いてしまったことだ。民主化勢力の一部は政府の要職に就いたが、そのほとんどが実際の能力はもっていないかった。そのときに、このように民主化勢力が全面的に撤退したことはまちがっていた。

私たちは政府に参加すべきだった。あるいは、私たちの勢力を解体しないで、国内にかぎらず世界的な連帯体制をそのまま維持しながら、継続して政治に圧力をかけていくべきであった。そうしていたら、韓国の民主化も失敗しなかっただろうと反省する。

いまは、知識人、市民の連帯が世界的に新しい社会を構築しなければなるまい。これが公正な立場で、ときにはアドバイスもすれば協力もするが、ときに政治がまちがうときには、それに注目しながら強力な圧力をかけていく。いまは知識人と市民とが対等な立場に立つべき時代だ。市民的連帯をつくって、そこに知識人も参加していくことにならねばなるまい。

今後、韓国の民主化がどのようなかたちで進んでいくのか、私は注目している。かつてのようなかたちでの知識人はいない時代に、どのように市民的連帯がつけられていくのか。そして、政府とどういう関係をつくっていくのか。私はいままでわれわれは現代的にはなく、近代の延長のなかに生きてきたのだと思う。

現在、日韓交流にたずさわる人たちはぐっと増えた。にもかかわらず、その人たちの政治意識は以前よりも低くなっている。それぞれの政治意識を高めあうためではなく、ただ自分たちの興味や関心のために往来しているに過ぎない。

日本も中国も韓国も、現実政治の上では反動的で、自己利益を中心に据えて、お互いに反目しあっているように見える。しかし、私は反動というのは、歴史のなかでは一時的な現象であって、永続するようにはならない、再び連帯の力が沸いてくるようになるだろうと思っている。

市民が政治に隷従した時代はもう終わった。政治権力が絶対的に国民を支配する時代は終わったのだ。そこで市民連帯はどのような形で形成されるのか。新しい連帯の姿をどのように構成し、歴史を変えていくのか、それがこれからの課題である。とくにアジア的な市民連帯をどうつくっていくのか。日本がいまの韓国市民の戦いに連帯することも可能ではないか。これまで日本は、アジア全体の問題を考えるときには、アジアの国々の先頭に立つよりは、それらをサポートして盛り立て、それに力をつけてやるという役割をしてきた。また、過去の歴史からして、日本はアジアの国に先立つということはやりにくいということがあるかもしれない。アジアの国のほうも、日本に対して警戒心をもつということもあるであろう。しかし、そうした関係にありながらも、歴史的に日本は、アジアの革命のセントラルの役割をもっていた。孫文や魯迅の動きも朝鮮の2・8独立宣言も、東京を拠点としていた。そこから韓国の場合は国内の1919年の全民族的3・1独立宣言が生まれ全国的運動に広がっていったではないか。

かつてのようないまの日韓の市民連帯が、いまのアジアにとってひととき必要となっていると私は思う。

本書では、韓国民主化運動の時代を、韓国の『東亜日報』、日本の雑誌『世界』に連載された「韓国からの通信」、そして日本の『朝日新聞』において、どのように伝えられたのか、を整理してみた。3紙・誌を並べることによって、とくに日本の読者にとっては、韓国での社会的な変動に対して日本社会がどのように反応し、関心をいだき、またどう関与し、さらに韓国の民主化のために日本、または米国の政権にどう影響を与えることができたのか、を知ることができらるだろう。ほう大な資料を圧縮するために無理な努力を重ねなければならなかった。しかし、それらは歴史とともに流されいくのにかかせるには、あまりにも口惜しいことに思われてならなかった。何よりも私はあの当時の日本の国民とジャーナリズムの友人たちに深い感謝をささげたかった。

この頃思うのは、韓国で現代史について書かれた本を読むと、まるで韓国内で自分たちがすべてを戦って民主化がなされたように書かれているのが気になる。そのときにいかに海外の人と連絡をとり、海外で連帯することによってこれが達成され、これにいかに関内の軍事的専制権力が対処しようとしたのか。そのなかで、私たちはどう連帯し、また、その対話はどのように続いたのか、これが書かれなくてはならない。とりわけこれからの生き生きとした歴史のために。

自分の歴史がほかよりも優れているといたいのがために書くような国史、そうした近代的な歴史の書き方は古い書き方だ。これから世界的にどういう歴史をつくっていくかと考えていかなければ、現代において自国の歴史を担っていくことにもならないと私は考える。

2017年2月、富坂キリスト教センター・ゲストハウスにて。